



文庫11  
A1470

修身千代見草初号

諭言 服部應賀著



柳田文庫  
文庫11  
A1470

東照宮御在世の時或日長臣某と召れて汝みづかふ令しん一句  
 をめと修身の要ようを示しめさんとするするる其句そのくふ五字と  
 七字あり汝みづかの望のぞみやと仰おほせらるる某平伏まふして  
 夫その柯のがかとありとも御意ごいお任せませらるるべくゆへども  
 相成あひべくハ両句とも拜受まいた仕りしとと尤同断ゆゑの意いおけ  
 何卒なにとぞ五字の方かたを示しめさんべいと願ねがひける爾しかららが五

48-7688



字の句と示さんそまの扱○不上見の五字之其七字  
とつゝの刻の程をたまの七字之此二句二字の増  
減へ何れも其意ふかいての替るとる一並の諺ふも言葉  
多き品少しといふごとく何事も秘事の捷ふるもの  
あり此の學庸二書の心目少く身を修むるの要語  
わが上天下と掌握するより下陋巷に住者までも常  
住坐卧是を守れば一生身を錯らば譬へ博學多藝の  
透人といふも是とあつては力を保ち家を濟ふると  
あつた古歌ふも笠着くくせ已が心ふと何るも同

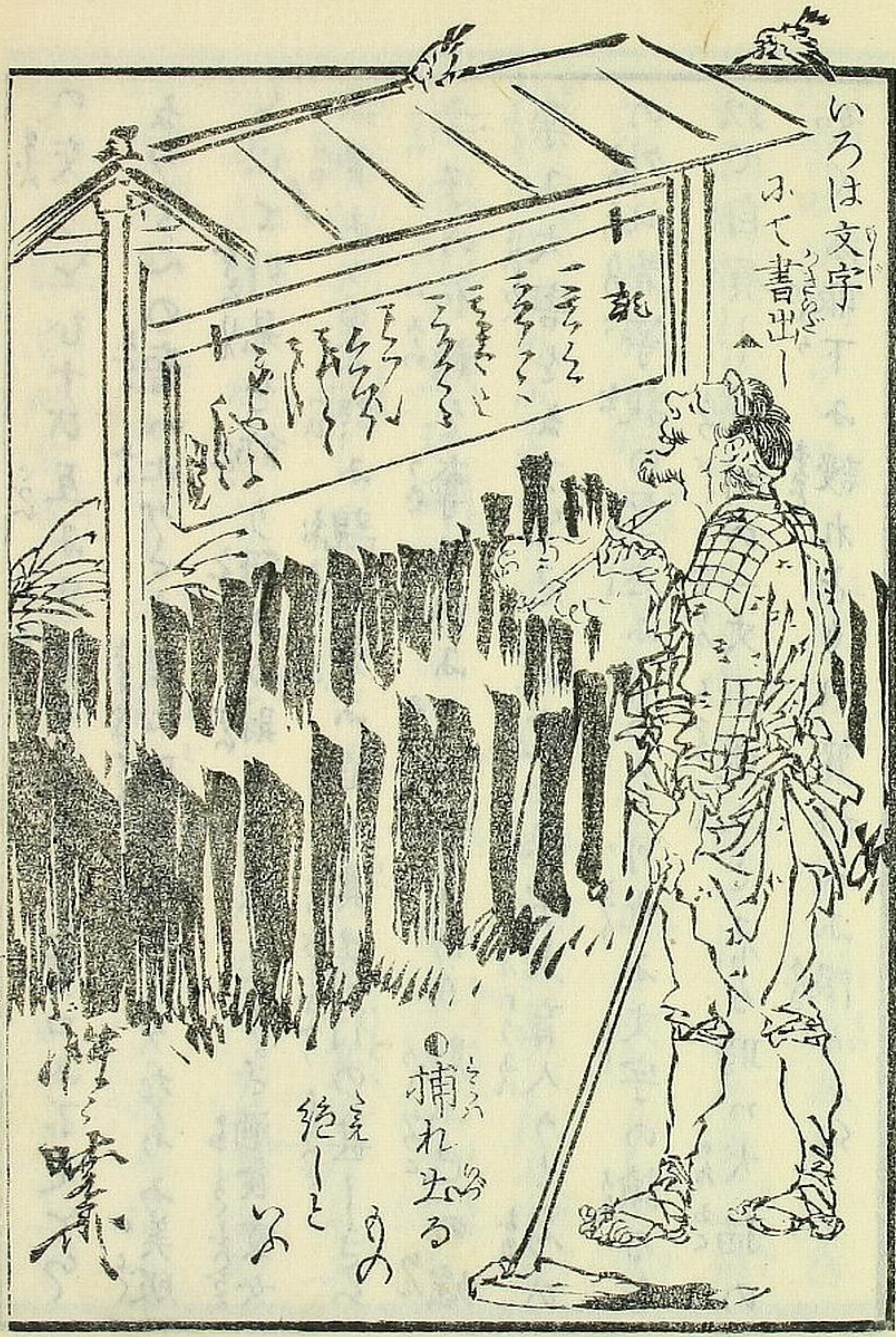
意之汝賢くも七字を採ず五字の便理ふつゝハ吾不於  
ても頼母しくおもえらるゝと仰らる其時某平伏の  
首をあげて再拜し愚臣何を辨ふべきさうりる  
かゝ我君何るの堅句を示さうやと胸中を冷し  
とところのひもよゝげ假名の五七字を以て修むる要  
路を手軽く示さるゝの誠ふ堅句ふまきうりて殊更  
難有くぞん奉ると誠心ふ感伏令られしと有  
とぞ蓋是而已ふ何れに神君の毎々如斯き名言を  
以て諸臣を諭しめ御身るまの既ふ衆樂の中より

立て全國を一統し天意を安んず奉る大將軍の御身  
ふても常小質素を守らせらる仁慮を保護の甲冑  
と成りて國政を任用多人が諸臣の靡き従ふと  
さるが乳児の慈母を意ふが如くありし由末代の  
今小至りても神徳の四方小輝くをえべし再るは往年  
時勢の然しむる處より國政ありてまじり忝るくも  
聖主自ら國事を司りて鞏馬と雲下ふめぐる  
めり小ふむねが其厚き天意を奉りて在官免務の  
士と分るは普く全國保護の政躰を補助する是を

士の道とよべし刺へ皇旗小向撃の者とりへども  
生い恩免の上朝臣の列ふつらあり死の朝幕の隔  
なく普く同一の祭典を蒙るをんく同生の人民ふ  
親疎多き仁政を仰ぐべき小自己と錯り已往の家  
録を顧みて今日の不足を患ふる者も毎あるや是  
を諭し小譬あり茲小永年籠中み扶持せらるし  
小鳥のうい今籠中と放たきて身の自由を得とも利ぬ  
羽の自由を得ず去るぬ食の求ぐと唯忙然と餓  
死する鳥のあはれたる籠中の扶持を放るると山林

三  
田野たのやの木の葉のくさ草實くさじつ穂虫ほちゅうもあまは其食そのくふ附つてゐる  
死しせず方今まづ家録けりくある士族しぞふ身みの自由じゆうを得えさうむるの  
籠鳥こてうの山野さんやふ出でて自カじかの食くある上うみ余食よじく何なにが如ごとく  
あまはあま不足ふそくあらんや此理このりを考かんがへぬ者ものハ時世ときよふ及および  
て彼神君かのしんくんの要言えうげんを考かんがへざるより已おのれく招まねぐ不足ふそくあまは  
己おのれを責せむより外ほかハあ一人ひとりとして不足ふそくと思おもへば天子てんしなる御  
身みふも不足ふそくハ有あるものあり況いはんや下輩げはいの者ものふわうりてい不  
足ふそくあき者ものいふで何なにるべき元政府もとせいふの時百俵ひゃくわう千俵せんわうとる少人  
數かずの者ものの中なかみ極貧ごくびんあり又十俵じゅうわう二十俵にじゅうわうをとる多口たこうの者

小祐福せうぶくあり此論このろん古今ここん同一どういつあまはあま今士族いましぞふ普あまく家録けりくを  
加増かぞきるとも普あまく不足ふそくあき者もの而已のみハ又また士族しぞの  
家録けりく往處かうじよを普あまく召放めいほうししるとも普あまく餓死がしする者もの而  
已のみハああ且無録かつむろく士族しぞの困窮こんきゆうするををんんふふ尋たづねねくハ大慙おほなげ  
を元手もとてとして奸商けんかうの徒とふ交まじり或あるハ已おのれく實情じつじやうを失しひ  
て得心とくしんといひいななぐる過當かたじけなの高利金かうりきんを貸か或あるハ酒食しゆじき賣う  
女めふ奉還ほうげんの資本しやほんを失しふ等ら是皆神君これみなかみじんくんの要語えうごふ背そむきか  
くく招まねぐ破産はさんあまは他ほかを尤もつとりりやある近頃府縣ちかごろふけんの  
士風しふうを見聞けんするふ何地どこハ九百員ひゃくやくえんの中なかみ四五人ごにん同志



いろは文字  
 みて書出

捕れ出る  
 絶一と  
 の



神君御在世の時

本多作左工門

三州の奉行

ありしが

法度ふ背く

農民多く出

けり由

其制札の

真字と背て

其あしへ

けまのまよりして

法度をよ

りて

の交りまじりとむすびむすび互たがひに坐食ざしょくをぬりぬり見みず口くちに不足ふそくとて  
るるぐぐ心の奢あやうの止とどぐぐ黒心腹くろしんぷくを掩おほらんがたぬたぬ美服みふく  
を以もつて外見げんけんを飾かざり限かぎる財ざいあり限かぎりあき酒食しゅじき賣女うりめ  
小費せうひもや由よし終つひに親おや兄弟けいだいに迫おそり其その暴行ぼうぎやうの甚たゞしき  
妻子さいごの衣類いるいを奪うばひ飢うゑふ及およぶ者ものもあり斯かく一いつ已いの端たん  
樂らふ大害たいがいをなすと見てみて究まて無学むがく文盲ぶんぼう人ひとうと名なひ  
の外ほか此こ者もの等ら親おやの厚志こうしふよろしく可か也なりふ文字もじの讀よるを  
以もつて自負じふ一いつ質朴しつぱくの一文いもん不通ふつう人ひとととる時ときの犬猫けんねこの  
如ごとく小眼せうがん下げ小謾せうまんれとも此こ質朴しつぱく人ひとに限かぎりて

政府せいふの掟おきてをよく守まもり身みの程ほどを志こころす時世ときよふ志こころす  
妻子さいごとささして夫々それぞれの活業くわつぎに寸暇すんげふをわわむむが由よし小禄せうろく  
しり人ひとども家いへに餘財よざいあり是こゝと以もつて渠みちふらふふるるや学がく  
問もんの何なにのためためににままるるののああやや开ひらけけ時世ときよを志こころすす坐食ざしょく  
借財しゃざいを嵩たかむ為ためににままるるのの學問がくもん又また奉還ほうげんの資し本ほんを  
酒食しゅじき賣女うりめに費つひして妻子さいごを飢うゑへへ後あとに瘡毒さうどくのためために  
五身ごみ不具ふぐの身みとありあり一生いっせいニニヤヤとありありとありありする  
の學問がくもん又また他たの物ものを盗ぬすに除よぎ族懲役しゅくちやうえきとありありためために  
學問がくもん都たにに此こ者もの等らの學問がくもん此外こゝろに用立もちだ知ちをを見みず返かへす

府縣ふけん小學校こがく繁殖はんしよくすまは諸親しよあんも子弟しよていとすめり勉べん  
強きやうさせらへよけきども鷄わさうを飼家くわいけへ必かならず犬猫いぬねこ不用心ぶようしん  
とまへー扱さ彼徒た何時いつ大小たうせうの憂目うゑめとらうら自業自得じげつじく  
果はあくか多おほむ不足ふそくらさきども歎然たんぜん至極しごくなるを  
其者そのものの親兄弟おやけいあに妻子つまこの身みあり天てん此無罪人むざいじんの難儀なんぎ  
と哀慙あゐんありて此中一人このちういちにんを本心ほんしんに立歸たてかへらせり類るい  
の友ともと引ひりのゆゑ余輩よはいも善ぜんみ歸かへすと何なんらんり但た  
一ひと又また嚴科げんかふおとて余よの足あしせしめとするをめり  
免めんあも角かくふも天てんの手てを招まねぐより外ぐわい所置しよぢへあらし

さきども夫おとこの願ねがふべき業わざふもあらし移うつり茲こゝも悪人あくじん  
の善人ぜんじんと變かりし誠まことをり不ふ昔むかし瑠團るだん右工門みぎくもん直之なほゆきの子こ  
出家しゅつがして雲居うんきよ和尚わうしやうと号なづせしが伊達政宗いだてせいむねの招まねふ  
よりと奥州松島おくしゆまづへ面おもて向むかふとと東山道とうざんぢう青野あおのヶ原がはらふ  
かして時七人ときしちにんの山賊さんぞく出て和尚わうしやうの所持物しよぢぶつと棄うするも人  
夫おとこをとらせし七盗しちたうへ悪業あくげうの自みづから身みを害あやま又またな  
るを論ろんしけき其深理しんりをさしりて心こゝろをあらしとあ  
終はつみ弟子でしとありて七人しちにんとも天壽てんじゆふ終はつしとらふ又またら  
庵いん和尚わうしやうといふ者ものの元笛吹峠もとふえふきとうげの強賊きやうぞくありしが能登國のとのくに

總持寺の住僧普香庵通灯和尚を殺さんとせし  
み是由まこと悪業の永續せざらんとて我憫み教化せ  
しかば速み弟子となり終み小田原最乗寺の開山  
とぞある身を亡し家名を失ふみ於て山賊も士  
族もかたむとるし又身を改るみ於ても同断あり  
世み生まるとる者の活計み辛苦まるとる人間而已みあ  
らば鳥獸草木もあやむとるわば鳥獸も子を養  
育するみ丹情を盡み子の成長をみゆるみ故ありさ  
れば子として親をうらみれば殊み親の養を放わす

自食する人よりも早し又非情み譬み草木もん  
あまばこそ四季折々夫々み花實をみすび乾中松  
柏の二木の霜雪の中み常盤の色をかえざるを以  
て其操を詩歌みよよと人身の賢負み譬るみ今更  
しよも古めしけきとも更み又賢固の操あるみ濱邊  
み生み松みあり是等み若苗より日夜濱風み吹き  
るがう幾百年を経る大木とありて其根元のさるがう  
蛸の足と廣げ立ちたる如き根上りとあり其一木の命  
と頼む土砂を風波の為み削らるるを忍びかみ



猶四方地下へ根を深く張つす此一念奮発の効一き  
ハ其形をりてあるべし夫のそあるは演進み連々と枝  
を列ねて農家田畑の風除といある开も食ハ人の元を  
ねバ田畑を保護する物ハ是人命の保護之斯非惜の  
草木一人一身の活計を獨り守りて國土へも忠儀を  
盡すのありふ況や生者の長る者其身を錯るとなるは  
是今日眼前の急務あり

○二号引續出板仕候

修身千代見草一号終

修身千代見草二号

諭言 服部應賀著

夫禽獸魚虫の轉吼啼呼する音ハ人身不通ぜざる  
とり人ども各々思意するところあり又非情の草  
木も季をたぐはず花實をむきハ他枝ハ已と募ぎ  
一身を保護する操あるを此上号不譬諭せしが尚活  
目の餘談あるがゆゑ茲ハ夫と補嗣を蓋予ハ永年無  
用の身あるども今日無用の身も有用の財るけねば

世小住ことあゝだ 蕭條も秀筆とありて 數年間  
屋もるき高方小取付借家の店賃日々の鹽増小  
へ足りけども 無用の身小又、無用の厄介も  
多くありの謂所重荷小附ともいふべきは是が為  
細き活業の筆の頭をかき今日と以て翌日の奈何  
あるを知らず暮せしが意なく明り小治る八とせ四月  
始つうと旅をまらぐのふ 沼津の籍不復し是如へ  
来て見りけし山へ變鷹富士の外不幾程も何と  
とも是等ハ一ツとして懐不開る山多々松バ空一

き手小草花をつと且夕出口町の精舎へ詣て実の  
母の墳墓と廻り襦袢の養育あり幼年の體も  
他ふまきりたり無盡の大恩と稱へ又東都の入谷  
て小寺あり肉父の骸と埋バ彼方此方へ一念の時々  
小箱根山と往來まらふ電信の線とたのまらば其余  
の家小ありても雷の食滞の如く虺倨傲て良の火  
玉を灰ふうぐあ來住の行末と考へ居ける小或日家の  
柱の割目より羽蟻若干這出し北の椽先  
出さずよりありひくふ雨去りけるが椽より椽先

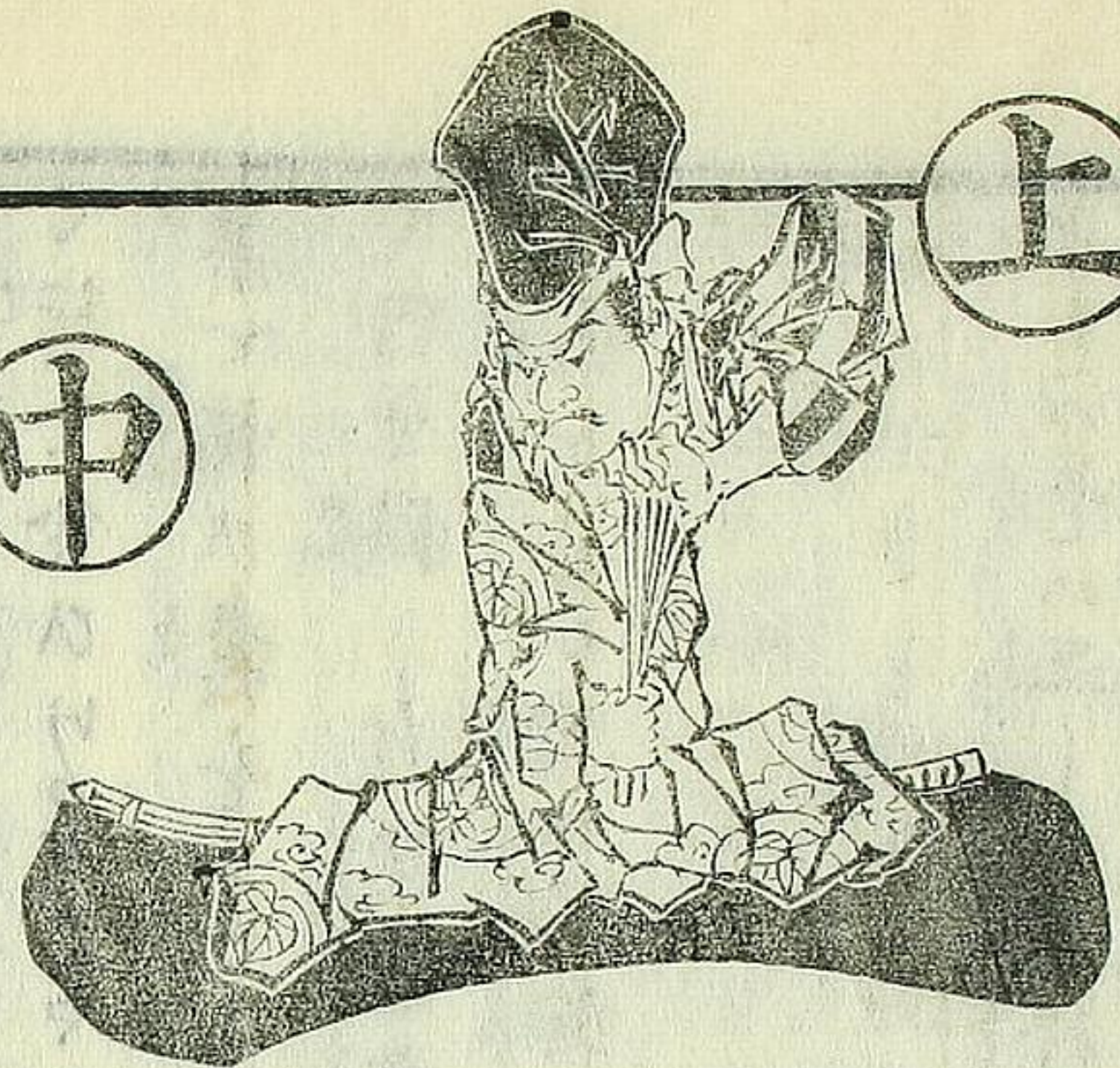
まうせのさるぐら兵卒の隊伍と烈く行かどく一匹  
として横行せむ悉く道を同くするの滅ふ言  
合を考ふるが如し此時を掃除うんとする者あり  
ハ夫ととらめていふ斯の如き小虫の群行するもの  
一匹として自然の道とあやまらぬものを況や人として  
此心をあはざることのあらんき其終ふなくとも何程の障  
とらなれずと掃せざりし一時間たざるも皆飛去ぬ  
其折りも縁先ある踏石の不平たる成直さんとせし小社  
石の下ふも又數々の蟻屯集して甬も卵ありは此石を

揚らる小礫の大難の限りとやあめは何れも卵とら  
へし腕眺左迷ふ中もの普く親の誠心を失は子を愛顧  
する厚志あると見る感ト手早く石を元の如くおまきとく  
安心とさせしめん思ひか斯りて又元のどくせが動  
揺まる然皆押潰へきと手頃の石を間小狭く元の如  
くありぬ又此傍小一株の菖蒲草あり日陰のゆゑ  
ふる瘦く生るが故此花の咲やと波けをば去年花四五  
本をみるとり者何まば夫より冬も日向より花の端へ  
二株として植替し小廿日おど過けをば大株の方小花

二十余本を出し小株の方小花十七八本を出せ其葉の  
いとけなまども清白の花數本をみる馬唯其處を  
得さしむる故あり扱又此二株の葉小黒赤斑の毛  
虫一匹宛あり其姿見るも怖しげるるが是も生類の  
一種ありとを怪おきし大株の方の宮澤義武子の  
庭へ持行しゆ人其虫の否のまゝに殘る毛虫の毎日  
葉の半より上と三四枚づらひいぐをどるく某葉を  
嚙とらふ身不纏ひし様は宛然農人の藁を着たる  
如く花の莖へぐらうさがりうらひ世ふり不葉虫の形之

此虫頗て蝶不も化くと時々るを巢の口より頭を出し  
て葉を食ひけるが毛のまゝなり又毛を食て  
巢を補ひ糞をすりぬ巢の下を開きて地下へ落し  
て内を糞さだ喰葉盡むる巢を曳し他の葉へ移り  
人影をみる時の恐縮して巢の口を締不工なり是迄  
をみる日數凡五十日不及べどもいままに化むは虫の親  
那の如きものあり此草小其巢の作るべき夫と見  
ざるは是の正しく飛行の虫の卵をまが成日へ化す  
らん扱此虫始々怖しき毛虫と名ひし獨りす家

上



中

中といふ文字の  
上へ中下へも心が



上といふ文字の下が

塞ぐつて下の尻へぬ形あり  
是と下へ反せむ下といふ

字ふるある其姿

高位の如し

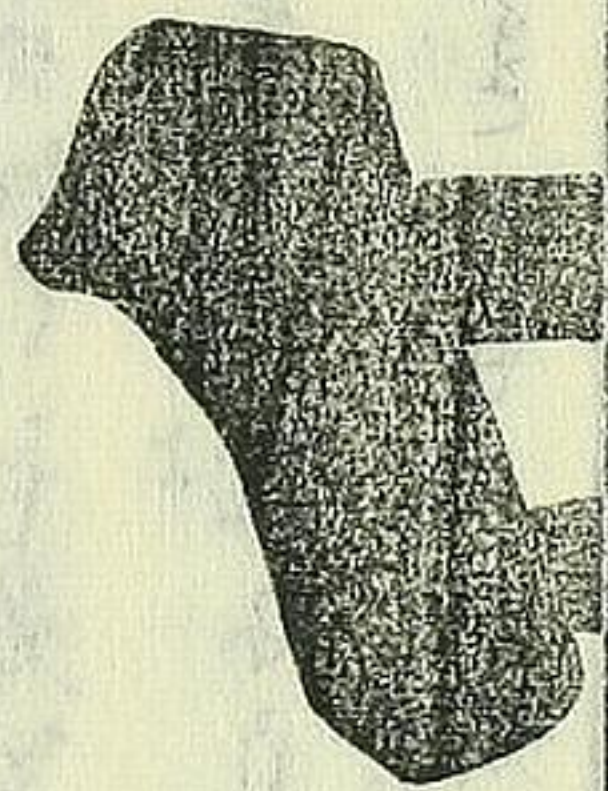
よく通りて上下ともお

尻へぬ形あり是を

下へ反して見ても同ト

中の字おてき姿

役人のまじり



滑喉養物

下といふ文字の上が

上の尻へぬ形あり

是を上へ反せむ上といふ字ふる

其姿下良の



と濟へ身と修る効をえとより終ふ永日の友と一けき  
バ度々の風雨不業と害ふを勞敷く必ひ今戸の内へ  
移してそ變化まる日と待のそ根を以て他の蛄蠃  
の身と必ふ不都鄙ありるべと庭木不毛虫の生むを  
ハ悉く焼捨る者ありとも其主人花實と愛む心あり  
るぐ物命を憐むんあき異や其姿の怖一まへる  
不距獸不牙角つるが如くそ力を保護するの甲冑不  
て他と害を為ふのあはれ世ふりてあそぶ鈴虫松虫も  
此毛虫も同ト虫あるまとも人の好と好まざるところ不

よつて愛憎さるまこと凡宇内不生物何も天の賜あら  
ざるあり其中不人の仁義禮智信を兼備るを以て  
萬物の長と稱之爾る不其五常の第一とする仁をも  
あはれんて何を以て區別せべきや世界の生物の倫同一なる理の造化天心録より述る  
毛虫ハ焼殺さずとも其化まる日と待不哉何をりりところ  
あらん然る不是を忍むざる人と毛虫より斥してハ又毛虫  
ともいふべきなり此外又畑物をるる不胡瓜ハ漆竹不徒と  
其手蔓を延し玉蜀黍ハ獨立するものあるまは三月不徒と獨  
根を張と彼濱松の如し然まは上ふ虫類より此菜物不

至るまじく皆夫々不自然の理を以て一身を守り又子を養育する効きを僅の地ふると初めの如く況や全國中の諸物計べうと雖も盡で此理不反くべきは是れ不背の唯人身而已あるは上号の意を嗣で與ふ述ると猶又耳不惱も悦て納め人并も鳥獸虫の類の羽翼手足の自由を以て其身一代の家禄とま今の士族の其自由の家禄ある上ふ又家禄あり其身を以て親族の財を虐げま他借財の山を有る者の中不夫を掩さんふあり又其上を借るふあり但し身を誇ら

んとふり不正の財を以て美服と拵へ外見のを飾るとも酒樓娼家の女どもは渡世ゆ急ふ其形之美を譽べきが近所合壁の者の時節あは義理あはだの狼が衣を着るとも後指不諱るを顧よ昔かろう美服と惹て咎を請う者も幾人もあまど麻服と惹て叱らるる者一人もあ殊不神君御在世ふハ身の程をあらうじて家名を失ひし者数多あり今既の家禄奉還する者の中ふ一己の酒食拵懦より先祖の余光を失ひ妻子不艱苦さまる者多くあま士族の力上

此稿 太平 五月 成バ 今ノ 金祿 二當 ラス

と茲ふり當時玄米の相場九一四ふ付一斗五升と見  
る是則一口の捧祿之是と五口の者ふ充又五口の家ふ  
三人の口あると見做一三口の米と其食ふ除き残る二  
口の代價の一月ふ金二四之是を一日割バ一日七銭ふ  
足らば此七銭を三人の着類より炭薪塩味。三食の  
菜。紙油湯羹。髮羹。良の類ふ充るが不足のふ逆も  
あり此不足を補ふふ蓄財を以せを山を喰ふを  
の餘のふりされれば此限りと大小ふ越すのハ又大小ふ  
餘力を當ふありさるるく當をあらとする身上を顧

ず坐食して酒食ふ費ま者借財の外ありけむ昔時  
の持樂ふ十年先の食とも取越く喰減ま正夢の  
向あり又三人の雜費一日ふ七銭ふても足るふ為ハ  
是たる之此覺悟ある者譬へ学校ふ入て立文字横  
文字の達者とするとも寶の持齋とあるの彼上号ふ  
述一放蕩人のとをふく知べ一方今諸縣ふ學校  
繁殖はまきども其入費天より授るものふあはば  
是皆活業より出る処あるは學問の根ハ活業  
ふり活業の餘財ハ身の程を知より歩まは他の



眼をよろろいさんとして已か財を費し獨美を飾りて衆人ふ謗まんより寧き付を妻子ふおよぶさば是ぞ誠ふ自他衆目への身の美を飾と云ふをのあり

○第三号引續き

發兌り〜い

修身十代見草二号終

修身十代見草三号

論言 服部應賀著

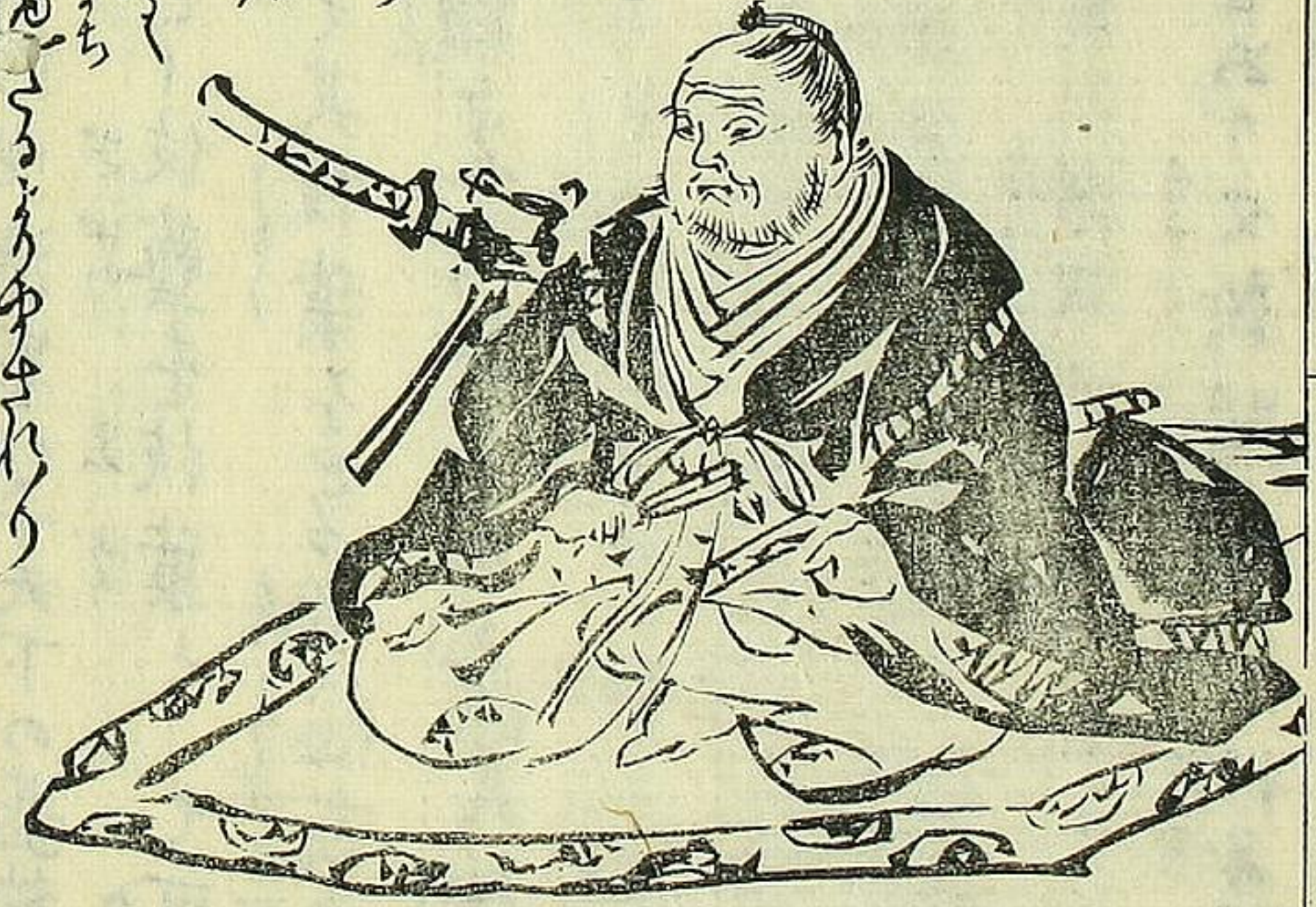
夫學問隆盛の世と金由道の爾を遠小求め事の易を難小りとむ文花の弊宜く督を盈し近代府縣の學校小於て童男童女を募集し諸業の學問を勉強成しむるハ歎賞厚辨をるとらるれども其學問を見聞する小専ら文章筆術及び内外の歴史地史等多く修心済家の教道不至りて殆ど少

抑も普天下（おさへ）小生育（せういやく）もる一切（いっけつ）の生物（せいぶつ）ハ修此（しゆし）の外（がわい）他（た）も  
其（その）同生（どうせい）も人間（にんげん）の一種（いっしゆ）ハ天授（てんじゆ）の活業（かつぎやう）也大古（たいこ）より（より）こゝろ  
世々（よよ）の智者（ちやう）新規（しんぎ）を創（つく）立（た）して追々（おひ／＼）天授（てんじゆ）の財業（さいぎやう）を改（あら）り終（は）  
不（ふ）今日の衣食住（いしょくぢゆう）といふありぬ是（こゝろ）が為（ため）不（ふ）廉人（れんじん）大道（だうだう）小徑（せうけい）  
を昼夜（ちゆうや）奔走（ほんそう）して苦勞（くらう）もるを見（み）る往昔（わうしやく）の智者（ちやう）も  
今人（いまじん）不（ふ）苦惱（くくわう）をあゝ人（ひと）一（ひと）罪人（ざいじん）もる是（こゝろ）不（ふ）做（しやく）る又今人（いまじん）の  
智者（ちやう）外飾（がわいしやく）の業（ぎやう）を究明（きゆうめい）して繁多（はんた）もるハ又後人（あつちゆうじん）の  
罪人（ざいじん）もる人斯（ひと）のどくもるれが諸人（しよじん）の經濟（けいぎ）ハ甚（しん）ど六ツケ  
しとりのゆへ孔子（こうし）の語（ご）不（ふ）由（よし）天（てん）より廢人（はいじん）不（ふ）至（し）るも

此（こゝろ）を修（しゆ）るを以（もつ）て本（ほん）とをといふ又假（か）此（こゝろ）済家（しやくけ）ハ平天下（へいてんか）の基楚（きそ）  
あるが文人（ぶんじん）學問（がくもん）不（ふ）終（は）る是（こゝろ）を幹（かん）とて伎藝（ぎぎ）を枝葉（えだ）とて可（か）  
るべし爾（なん）まは諸生（しよせい）其幹（かん）不（ふ）頼（たの）て其枝葉（えだ）をさる者（もの）ハ必（かなら）高木（たかき）  
とありて國家（こくが）不（ふ）花實（はなみ）の益（えき）を頭（あたま）さ其幹（かん）をさる（さ）は其枝（えだ）  
葉（えだ）を採（と）る者（もの）ハさる（さ）る千金（せんぎん）を懐（かか）りて海底（かいだい）へ沈（しづ）むか如（ごと）く近代（きんたい）  
其幹（かん）をさる（さ）は多年（たふねん）の學費（がくひ）を積（た）りて漸（や）く卒業生（そつぎやくせい）とあり  
今（いま）ハ一校（いっけう）の教師（きょうし）と成（な）り至（いた）り浮意（うゑい）不（ふ）品行（へいぎん）を乱（みだ）し損友（そんゆう）  
放蕩（ほうたう）の徒（た）不（ふ）交（か）りて雜戸（ざつこ）の奸業（けんぎやう）不（ふ）漂流（ひょうりゆう）せが間（ま）ゆあり  
車夫（くるまぶ）雇人（くわいじん）とすも零落（ぜいらく）もる者（もの）あり又新聞紙（しんぶんし）上（かみ）不（ふ）姓名（せいじやう）を

東照宮御遺訓

又乃一生を奉る何と負て  
 遠き道にゆくこといそいで  
 不月由と常とるへ不足家  
 出るるに望むるの困窮とる時と  
 るに必ず一堪忍をそりせ人の  
 けいひいりわき款とあり人勝る  
 ばのり知くおるるをあらはれ  
 害もの身について居已せめ  
 人を責るれ及ばざるハ陽さるる中されり



水戸黄門公

筆記の内

- 一 只今う日長くあるんこと
- 一 おり入庵
- 一 小すい各別せよ大奉ハ
- 一 かどうくえい

楠正成

金剛山壁書の内

- 一 学一白字はみおはれとわ
- 一 後めあるをよとま
- 一 子跡々字形見
- 一 ちのくはれとわ遊若と
- 一 めとま



紫

頭あたまも悪業人を見まま巡査免救の者少すくるあひべ或あるハ  
 鉄面皮てつめんぺいの士族しぞくハ父母親戚ふぼしんせきの異見いけんを背そむき無法むぽうを以もつて無理  
 の貨殖かしょくを企こころて日ひあまくくハ異見いけんの如ごとく鼻柱びじゆうを步あ當あ耻ぢと諸人しよじん  
 小こささくく大言だいげんハ吐つども満足まんじつの五臓ごそうを持もて一身いしんの衣食住いしょくぢゆう入い  
 成なざるまハ誠まことハ拾ひろひ喰くく子こを養やしなふ雀鴉さくあハ由よし劣せつまりしハ开あけ  
 天あまハ禄ろくあまき小民こみんを生なげんといくどハ旅籠屋りょくどうやハて膳ぜんを居いて  
 喰くを如ごときのあひはらくくハ其人そのひとの食たハ其人そのひとハ授さづく其食そのたと  
 りいハ則すなはち人ひとの手足てあし多おほくく智者ちやハ智者ちやといはれ不た其手足そのあしを働あぎ  
 愚者ぐハ愚者ぐといはれ不た其手足そのあしを働あぎはるく天あまの食たハ其中そのちゆう不

あり然しかるく不た故蕩たう邪見じあみの者ものハ我食われたの手足てあしを働あぎはるく他人  
 の手足てあしの食たを貪あまり己おのれハ無益むえきの酒食しゆたハあまて勝手かたて我われ終しまるく  
 意い小任せうにんせぬ時ときハ醉すいハ棄すて大聲おほなこゑを發たへる父母ふぼを罵ののしり器き  
 物を破損は損さん深夜ふかやハ至いたりて五隣ごりんまでを敬馬けいばを者ものあるを見みて  
 或人あるひと云いハ若輩わかくしの放蕩はうたうハ酒しゆの咎とが多おほくく此語このことば一理いちりあるに似にて  
 ども非ひあり何程いかに愚蒙ぐもウの白癡はくぢ多おほくく人心にんしんの靈たまハあまりの  
 又また醒さめてハ其非そのひを知しり必を愛あいを酒食しゆたより暴行ばうかう不た及およば  
 是こゝ必かならずを愛あいを身みを亡なす敵るく不た其敵そのたといはれて  
 是こゝを吞のハ双ふたを吞のハ同おなトとるり吞のハ我心おのれこゝろ一ひとツ止とまる由我心おのれこゝろ一ひとツ



るる小夫を去りて是を止ると懐いぬ上一一時の苦を忍びて再び  
自他の患を除んと自覚する人言者情有り酒を求る人  
よつて薬とも毒ともるれは咎ハ酒不あり求むる人あり然れ  
ども前文の如き酒狂人ハ口ハ喉三寸小酒食の甘味を見  
とめ五尺の軀を投出して自くら刑罪不行いまんとす故言  
よるハ人輪の本心を失ふりの由ハ是ハ人情を以て速るハ木石  
物云より益ありて害ありんを世上ハ人の本心を失ひし  
者不ど剛きりのあけまじ渠等が一族不連なる不幸の愁  
苦と悪業ハ他へ傳染の患ハ今日宮殿病疾

道路の不潔を掃除ある賢明の政府編小こをを上覽  
あつる廢し予維新の際世態開國未聞の改革不辟易  
轉動して貴賤不捨の朝意を錯り一家を滅却する士族へ  
對し過言の多罪を顧び其錯を會得させんが為不無誓  
の卑文を綴り此編の初号二号発兌より客年迄五年  
間不賀柱弱くして其用小立ざるや中人知己の士族尋常の  
高方不破産する者を除き奢侈放蕩を懲此とる  
又零落する者を正しく二十七名を見る又傳聞の者  
三十余名あり予が見聞する処ス人斯の如く況やと

全國不數へる其不潔人何程あん民事と又ども刑と  
 漂者の多きハ國の耻あり是を道路不換んや蓋し前々に  
 述る者の不品行ハ何れも彼幹小頼を枝葉を採りぬの  
 と見做せ何卒學問ハ修身済家の教道を第一と為  
 づきのるるり既ハ北條恭時の教訓不也尤の如く有り  
 ○萬卷の書を讀學するこも時不相應の文を志くぞん  
 口惜かる盈一言所一旦ハ義埋不叶ふ不似とらん事  
 有とも時不相應せざらん少ハ智者とらんべへん  
 唯古人の咄を轉るのたるの國家の大用とらん成

盈とび

修身済家を志する者ハ質素儉約を第一とて僭上する  
 とらるる譬へ貴人とりども是を守らざれば永續せん又  
 儉約と吝嗇との堺を注意せよ吝嗇ハ家を温めるりの  
 少くは易経に曰

○天道ハ盈ヲ虧テ謙ニ益ス地道ハ盈ヲ變ジテ謙ルニ  
 流ス鬼神ハ盈ヲ害フテ謙ルニ福イヌ人道ハ盈ルヲ  
 惡ンテ謙ルヲ好ム謙ル尊シテ光リ卑フシテ論ユ  
 ベカラズ君子ノ終リ也

修身済家を志ま者ハ又食と美宅を慎む  
 譬へ善相ありて善家小居住まるとも是を守らざる  
 者ハ貴賤とも小安穩るるべし半學者流我意を  
 慕て僭上まるとも天道自然の天刑ハ防ぐ小術あり  
 ○論語曰君子ハ食飽シヨ求ルノ無居安カラシ  
 ヲ求ルノ無事ヲ敏ニシテ言ヲ慎之有道ニ就  
 テ正スコレヲ學ヲ好ト謂可也而  
 ○子曰士道ニ志シテ惡衣惡食ヲ耻ル者ハ未ダ  
 與ニ議ルニ足ズ

○家語ニ孔子ノ曰ク人ニ死有テ其命ニ非ズ己自ツ  
 カラ取ナリ夫寢處時ナラズ飲食節ナラズ逸勞  
 度ニ過ル者ハ疾苦コレヲ殺ト  
 ○居家必用曰善病ヲ治ル者善疾ヲ慎ニ如ズ善  
 藥ヲ治者善食ヲ治ルニ如ス  
 修身済家を志ま者ハ又俗説歌俳をも見聞されバ  
 學バざると諸道の温奥を悟る近道あり  
 閑通和尚座右の記  
 ○人此世へ客小來ととかり人バ世話由苦勞由



350

357

修身千代見草三号 大尾

心小叶ハざる食小向ふて由馳走とおひ言て  
 喉ねばるるは夏の暑由容るるは中あな寝るるは  
 孫子兄弟猶りて相客も木投映  
 跡小心を残る暇もあなまの未  
 父母あはれをよそとて爰又客小味あは  
 かあはれ残るるはあはれあはれさ

